

# 若手奏者 言語超え 一体感

指揮者の大友直人が一線の音楽家たちとともに、世界から集まった若手演奏家を指導する「ミニエーション・マスタース・コース・ジャパン（MMCJ）ヨコハマ」が、26日始まった。今年で19回目の「イフワーク」を続けてきた背景には、日本の音楽界への危機意識があったという。（清岡央）

## 「MMCJ」創設音楽監督 大友直人



今年のMMCJは横浜で約3週間にわたって行われ、オーケストラで選ばれた日本、韓国、米国、スペインなど7か国の21人が参加する。弦楽四重奏と木管五重奏に分かれて学ぶ。「オーケストラのアンサンブルに直結する合奏の原形で、とても大切」だからだ。

### 19回目 今年も7か国から21人

「指揮者をどう取るかが一番大事」。1981年、NHK交響楽団でデビューした年の夏、初めて米国のタンクルウッド音楽祭に参加した。痛感したのは、音楽家たちが「日本の音楽シーンにほとんど関心もなければ認識もしていないのが現実だった」。既に海外の一流オーケストラの来日公演も盛んだったが、単なる演奏旅行先としか思われていなかった。

「音楽シーンを現場で担っていく人たちに日本への認識を持ってもらわねば。88年のタンクルウッドで指揮者のアラン・ギルバート（NDREルプフィル次期首席指揮者）と意見が一致し、若手を日本に招いての講習を始めた。ギルバートと2人で「創設音楽監督」として統括している。講習の最初は毎年同じ。「みんな初対面なので、おっかなびっくり。それが、一人一人コミュニケーションをとらなければいけない立場に追い込まれ、最後は濃密な一体感になる」。これまでの受講生からは、国内外のオーケストラに多くの団員を輩出している。「積極的に海外活動やオーケストラに強い興味を持つ人たちが出ている」と手ごたえを語る。「音楽家自身が日本人であるとか、アジア人であることを意識もせず、若い頃からいろんな人たちと一緒に音楽を勉強するような音楽シーンを日本に作れたら最高じゃないかな」。まだ10年は続けないという。

講習の成果は室内楽コンサート（7月8日、横浜みなとみらいホール）とオーケストラコンサート（13日、東京の紀尾井ホール、14日、横浜みなとみらいホール）で披露される。講師によるガラ・コンサート（4日、同ホール）も行われる。☎03・3470・3361。

「スポンサーの皆さんに支えられて成り立っている。私の白髪はMMCJの資金集めのためです」=萩本朋子撮影